Ⅵ 国際活動

＜1　国際会議報告＞

台湾における農業と農業施設に関するシンポジウム

相　原　良　安（農林工学系）

日本農業施設学会と中国農業工程学会（The Chinese Society of Agricultural Engineers）との共催による表記のシンポジウム・ツアーが，1979年11月26日～30日の5日間，中華民国台湾省で開催された。これに日本から40名参加したが，その中の一員として加わった。

日程は非常にハードなものであった。第1日，成田発→台北：故宮博物館参観→台湾大学農業工程学系・園芸学系訪問→中華民国農業工程学会・台北市留公農田水利会主催歓迎会。第2日，台北→竹南：台湾養豚科学研究所・台糖生産研究所訪問・討論会→台中霧峰：台湾省農業試験所訪問→中興新村：台湾省政府農林庁訪問→中興大学訪問。第3日，台中→斗六：雲林農田水利会訪問・輪番灌漑施設見学→烏山頭水庫・嘉南農田水利会訪問→台南→高雄。第4日，高雄：新台湾農機公司訪問→台北。第5日，台北→成田。このように，期間中，台湾各地の大学・研究機関等の訪問と施設の見学があり，訪問・見学先においては，中国農業工程学会から選ばれた演者の講演と参加者による討論会がもたれた。その内容は，農業一般，畜産・園芸・農産・水利の諸施設にわたる広範なものであったが，両国の参加者の中に，各分野を専門とする研究者・関係者がおり，活発な意見交換が行われた。特に，台湾における米生産量は自給量を越える現状や畜産における糞尿処理にからむ公害問題の発生等は，わが国がかかえている農業問題と共通している点が認識され，両学会を通しての今後の学術交流が深められる端緒となったのは大きな収穫であったと思われる。また，農業人口の減少に伴って稲作の機械化が急速に進展している現状において，日本が当面している農家の，いわゆる「機械化貧乏」を避けるため，機械・施設の稼動率を高めるような行政的指導が行われていることが注目された（本シンポジウムの一層詳細な報告は，農業施設第10巻2号に掲載される予定である）。

地形学の野外実験に関する研究委員会の国際シンポジウム

市　川　正　巳（地球科学系）

1979年9月15～30日，国際地理学連合（IGU）の「地形学の野外実験に関する研究委員会」の国際シンポジウムに出席および資料収集のためポーランド，スウェーデンに出張した。

私は同記委員会の正規メンバーで，会議中に事務的なメンバー会議（委員長はスウェーデンのA.ラップ教授）が3回行われた。研究発表は9月18日と24日に行われ，9月19～23日はポーランド南部のタトラ山地を中心とした野外調査が行われ，きわめて有益であった。私は9月24日の研究発表会の最後の座長をつとめ，同夜の Meeting では1980年8月下旬に開かれる日本でのこの会議への招待の演説と説明を行った。9月27～29日はスウェーデンのウプサラ大学および地質調査所を訪問し，関係資料を収集した。

第14回太平洋学術会議（昭54. 8. 18～9. 11. 於ソ連邦ハバロフスク市）

高　橋　正　征（生物科学系）

太平洋学術会議は4年毎に太平洋臨接の国で開催され，人文・社会・自然の全科学を対象としている。第14回会議の統一テーマは「太平洋域の資源とその利用」というもので，特に環境問題が各視点から検討された。参加者総数は2,000人程で，ソ連邦から1,000余人，日本からは約120人であった。私の参加したセッションは「海洋の汚染」で，大会のテーマを最も反映しているものの1つであり，4日間のセッションでは連日熱い討論が続いた。途上国からの参加者も多く，先進国の関心を訴えていた。社会主義体制のため，学会は国が責任をもって運営し，ために多くの人と各種のサービスがほどこされた。その点，自前でやらされる自由主義体制とは著しく異なっていた。また，個人の欲が中心になる自由主義体制下では，環境問題のようなものの解決はなかなか困難であるが，社会主義体制下では場合によってかなりスムーズにいっていることを知った。

沿岸湧昇に関するIDOE国際シンポジウム（昭55. 2. 2～2. 10）

高　橋　正　征（生物科学系）

1972年から米国のNSFの援助で進められてきた，沿岸湧昇研究計画（CUEプロジェクト）の研究成果の評価を目的とした国際シンポジウムである。大規模沿岸湧昇が近くに発生する国々を中心に，南北両半球の各国から約200人の研究者が参加した。湧昇現象は広大な海洋の中で，極めて特異的で，しかも高い生産性を特徴とするため，関心を呼び易く，生物・物理・化学の各分野で

大きな成果のあがっていることが確認された。特に CUE 計画の研究者の貢献は偉大で，1973年以来，実に200余報にのぼる斬新的学術論文が発表されている。しかし，本計画の NSF での最高責任者だった Jennings 博士が，シンポジウム最終日に行った総合評価によると，CUE 計画の各専門分野の研究成果の偉大さは十分認めるが，全体としての成果は必ずしも満足とはいえず，巨額な研究費を一括して投入した意味は余りなく，分野毎に分散して研究費を配分する従来のいき方がむしろ効果的だったかもしれない，というかなり厳しいものであった。「月にロケットを打ち上げる」といったような具体的な目的にしないと，学際的研究はとかくバラバラになって効率的にいかないことが多いことを知った次第である。

日米合同化学会議

手塚敬裕（化学系）

昭和54年4月1日～10日，ハワイ，ホノルルで開催された日米合同化学会議で，講演発表のため渡米。20分間にわたる講演と討論を行った。演題は“Photochemical Oxidation of Sulfide”である（本研究科年報 No. 2，P. 107，文献6参照）。内容は硫黄化合物の新しい光酸化に関するもので，化学研究科の学生によって最初見出され，報告したもので，それの後を環境研究科の学生に二，三手伝ってもらったものである（年報 No. 2，P. 107，文献3，4参照）。

ハワイもすっかり変り，近代化，俗化の傾向にある。以前あったのどかさが失われているように感じた。化学会では数々の著名な外人化学者と話す機会があった。化学はここ2～3年の間にすっかり変り，より高度に精密化している点が指摘される。純正・応用化学ともにより高度になっている点に注意を要する。

国際活動に関してこの紙面を借り二，三付け加えたい。

昭和55年1月，本学において一流外国人化学者3名を含む不安定反応活性中間体討論会（一部日本化学会関東支部主催）を開催，その世話人の一人となり有意義な研究発表討論（英語）を行った。速報つくば1月号参照。また，これ以外に年間20人近い著名な外国人化学者の講演が本学（自然学系棟，大学会館）で開催され，それに伴って，小人数の討論，国際交流が行われている。

環境研究科に関して云えば，53～54年にかけてイリノイ大学 Environmental Health Sciences の Professor R. A. Wadden が来日，河村教授が世話人となり本学に籍を置いた。公害研大気奥田部長のところでオゾンに関する研究を行い帰国した。環境研究科の懇親会に一度出席したにとどまってしまった。このように本学内での国際交流の機会は十分あるものと思う。